

わが道

わが友

1960（昭和35）年8月。生まれて初めて飛行機に乗り、36時間かけてイタリヤのローマに降り立った。当時の身分は東大3年生のボート部員で、舵手付きフォアのローマ五輪日本代表選手。現地では、抜けるような青空と大勢の美女が歓迎してくれた。出身地は北海道の倶知安。ボートとの出会いは中学3年生の時だった。北大のボート部が全日本大会で優勝し、地元で大騒ぎとなったのがきっかけだ。大学でボートをこぎたいという思いが芽生えた。ボート選手は背が高く、今や世界の強豪チームは平均身長が2センチ近い。オールを長くこげるからだ。私の身長は172センチ。同世代の中では体格がいい方で、東大に入学すると柔道部や野球部から熱心に声をかけられたものの、ボート部からはまったく誘われなかったため、自分からのこのこと入部しに行った。

最初のうちは負け続けた。自信を失いかけたが、1年上の主将から「来年は五輪だから東大としても出場を目指す。お前も合宿所に入れ」と言われた。東大は昔からボートが強く、戦前の36年にベルリン五輪に出たこともある。だが、当時は国内の決勝戦に

何とか残れるというレベル。五輪は別世界だと思っていたので一瞬、耳を疑った。それからの練習は、若い人たちには信じてもらえないほどハードだった。授業も試験も欠席し、1日8時間練習して12時間は寝るという生活を五輪予選までの8カ月間続けた。練習内容も変わった。コーチが東大医学部の先生に協力を要請し、当時としては珍しいスポーツ生理学を導入。腕の筋肉や心肺機能を強くすることに徹底的にこだわった。フォアは4人でこぐため、8人でこぐエイトに比べ、より大きな力が必要。冬場の雪下ろしや夏場のまき割りなどで鍛えられていたせいか、パワーには自信があり、私には向いていた。新たな練習法によって心臓と筋力が圧倒的に強くなり、だんだんとその気になってきた。予選では苦戦

を強いられる局面もあったが、優勝することができ、フォアの主将としての責任を果たせた。64年の東京五輪からは、優秀な選手を集めたナショナルチームが編成されるようになったが、ローマまでは大学単位のチームがそのまま出場した。名コーチと優秀な仲間が存在、新たな練習法の効果などが重なり、運も大きく作用したと思う。

出身地は北海道の倶知安。ボートとの出会いは中学3年生の時だった。北大のボート部が全日本大会で優勝し、地元で大騒ぎとなったのがきっかけだ。大学でボートをこぎたいという思いが芽生えた。ボート選手は背が高く、今や世界の強豪チームは平均身長が2センチ近い。オールを長くこげるからだ。私の身長は172センチ。同世代の中では体格がいい方で、東大に入学すると柔道部や野球部から熱心に声をかけられたものの、ボート部からはまったく誘われなかったため、自分からのこのこと入部しに行った。

＜略歴＞昭和15年、北海道生まれ。東大法卒。37年、積水化学工業入社。平成11年6月から現職。14年自然保護協会会長。16年から日本ボート協会会長。



ローマ五輪出場を決めたレースの直後に仲間（右端が大久保氏）と昭和35年5月、埼玉県戸田市の戸田ポートコース

ボート部で猛練習、ローマ五輪に出場

向いていた。新たな練習法によって心臓と筋力が圧倒的に強くなり、だんだんとその気になってきた。予選では苦戦を強いられる局面もあったが、優勝することができ、フォアの主将としての責任を果たせた。64年の東京五輪からは、優秀な選手を集めたナショナルチームが編成されるようになったが、ローマまでは大学単位のチームがそのまま出場した。名コーチと優秀な仲間が存在、新たな練習法の効果などが重なり、運も大きく作用したと思う。

現地に入ってから、ローマ法王の避暑地である湖に毎日通って練習した。そこで目の当たりにしたのは欧州勢の強さだ。本番も予選で惨敗。とにかくひどい負け方だった。そのときなぜか、頭が「がんがん」と痛んだ。初めて経験する肉体現象で、同時に「よし、本気でボートに取り組んでやろう」という意欲が不思議とわいてきた。